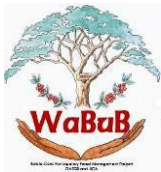


# WaBuB PFM News

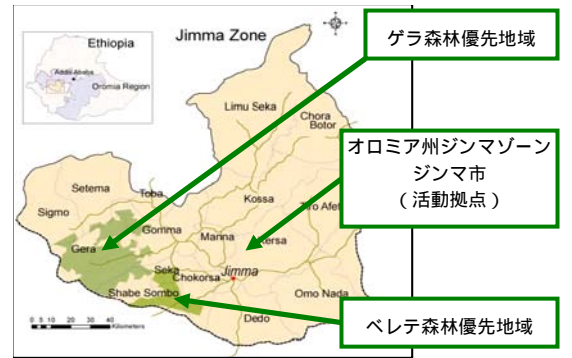
~ Respect Local People's Knowledge for Sustainable Forest Management ~



JICA 技術協力プロジェクト

エチオピア ベレテ・ゲラ参加型森林管理計画フェーズ2

2009年3月31日発行 (第26号)



## ベレテ・ゲラ巡業 ~ゲラ森林ワラ村の巻~

「農民から苦情が相次ぎ、普及員ではもう手に負えない...」と、ワラ村のアリ普及員が切実に訴えた。ワラ村の WaBuB は比較的スムーズに進んでいると報告を受けていたが、何が起ったのだろうか？ゲラ森林の中でも最も僻地に位置するが、乾期のこの時期はどうか車でも行けるようだ。「いざワラ村！」...郡森林官など4名とともに支援へ向かうことにした。しかし、ワラ村までの道を誰も知らない...。途中の村の普及員を拉致して道案内をさせるが、雨季には泥沼となる湿地帯が多く、道などは見当たらない。刈り取りを終えた田んぼや草原を突っ切り、小川をおっかなびっくり渡り、慎重に進むが、とうとう川にはまってしまった...。頼みのドライバーらは即座に茂みへ駆け込み、ゲロを吐き始めた。昼に農家から拝借したヨーグルトがあたったのか...。「こんな時に勘弁してくれいっ！」瀕死状態のドライバーを呆然と見下ろしていると、どこからか神の使いらしき村人が集結し、手に鋤を持った男が傾斜のきつい川べりを削り、石や木板をタイヤにあて、手際よく復旧作業が始まった。だが、文明の利器は泥に沈むばかりで、かなりの苦戦だ...。もう JICA には「ごめんなさい」をして乗り捨てようかとあきらめかけた頃、歓声と共に車が引き上げられた。「金なんかいらんわい！」と笑顔で見送る勇士達を背に、どうにか日暮れ前にワラ村へ辿り着くことができた。ジンマから7時間の道のりであった。



懸命に車を引っ張り上げる

村長の家に駆け込んでほっと一息したところ、無情にも雷雨が降り始める。村長は「2 か月振りの雨だ...」とはしゃぐが、我々にとっては悪夢でしかない。「どうしてこんな時に降るんだ...」と、一同が静かに私を見つめる。雨男パワー炸裂ということか...。しかし、まだ神は見捨てなかったらしく、翌朝は快晴。森林官連中に状況の偵察をさせ、とりあえず私はアリ普及員の WFS(農民の学校)を激励しに隣りの集落へ向かう。それにしても、この村の農家はどこも農地が広く、家族総出で農作業に勤しんでいる姿が目につく。かつては森林に覆われ、オロモ系住民が細々と農業をしていたらしいが、今やエチオピア北部からのアムハラ系移民が8割を占めるまでになり、農地が広がるばかりの状況になっているらしい。こういう村こそ、WaBuB や WFS の普及が重要なのだが...。WFS から戻って来てみると、広場に集落のほぼ全員が集まり、物々しい雰囲気で行われている。いかつい警官が真中で何やら叫び、それに対して農民が答えると、さらにオロモ語からアムハラ語への通訳が入る。偵察隊の情報に寄れば、違法伐採者を逮捕するよう郡の裁判所から指令が出されたが、警官が駆け付けた時には12名が逃亡してしまっていたらしい。「連れ戻さなければ、お前ら全員を逮捕する...」という強硬なやりとりがもう2日目に入り、逃亡者の出身村に分かれて具体的な対策(誰がいつまでに連れ戻しに行くか...)を話し合っている。その間、横では未登録の銃が押収されている。移住者としての警戒が強いのか、また、北部で犯罪を起こして逃げてきた者もいるという噂もあり、ほぼ全世界帯が銃を持っている。この日、32丁の猟銃が押収された。



次々と銃が押収される

それにしても、普及員は何やってんだ？この集落ではすでに昨年、バカリ普及員によって WaBuB が組織化されているはずだが、全く議論に出てこない。集会の最後で森林官が WaBuB の説明をすると、「どうして早く WaBuB を始めてくれなかったんだ？森林境界の確定ができれば、この事態も早く防げたはずだ！」と、逆に文句を言われてしまう始末。普及員2名と村長を呼び出し、事情聴取に入る。住民の不満の原因は、僻地での活動に嫌気がさしたバカリ普及員と住民との間の不信感にあり、WaBuB についての十分な説明がないまま登録の署名を強制し、WFS もメンバーが継続を望んでいるにも関わらず途中で止めてしまっていた。その後、新規に加わったアリ普及員が隣集落で WaBuB と WFS を始めたため、「どうして卒業させてくれずに、隣で始めるんだ！」と、対立が深まったようだ。激しい村長とのやりとりの後、森林官がうまく調停し、どうにか最後はバカリ普及員も気持ちを改め、「1から WaBuB を始めていこう...」と、和解することができた。こうした状況をモニタリングできていなかった体制不備を反省するとともに、プロジェクトとしての役割を認識させてくれた一件だった。押収された銃と共に一夜を過ごした後、ワラ村を発つ前に、森の中に湧き出す温泉へ寄った。湯治場として人気があり、老人達がのんびり湯につかっている。久々の湯で疲れを癒しながら、この見事な桃源郷がいつまでも残されることを八百万の神々へ切に願わずにいられない、2009年元旦に相応しい朝となった。



秘境 ワラ温泉！

WaBuB は、現地オロモ語で(地域住民により組織される)森林管理組合の略称、PFM(Participatory Forest Management)は参加型森林管理の略称です。よって、WaBuB PFM は、本プロジェクトが確立・普及を目指す WaBuB による参加型森林管理方法を意味します。

## WaBuB の課題解決に向けて...

これまで34集落で WaBuB 組織化のプロセスを終え、森林管理仮契約を締結しましたが、前頁のワラ村のように普及員が住民と十分に議論せずに進めてしまうなど、幾つかの課題が浮き彫りになりました。例えば、1) WaBuB で森林境界を確定したにも関わらず、違法伐採が発生した。2) 違法伐採に関する罰則などを示した内規が仮契約には含まれていない。3) 森林モニタリングや管理計画策定などの具体的な活動は、本契約までの今後一年間で行われるため、WaBuB が自立した機能を発揮するまでには未だ時間がかかる...といった点です。組織化の過程では、いわば普及員が中心となって各 WaBuB を引っ張ってきており(普及員参加型?)、今後、具体的な活動の実施を通じて「住民参加型」の森林管理が実現できるよう、それに必要な各 WaBuB の組織力を強化していくことが最優先の課題であると言えます。

そのためには、WaBuB 組織化および実施のプロセス見直しに加え、普及員の能力強化が鍵となります。特に、WaBuB メンバーとのモニタリングや計画作りを通じて、うまく住民の意欲を引き出し、自発的な行動や能力開花につ



普及員への研修の様子

なげていくための「ファシリテーション技術」の強化は必須です。その一歩として、タイ国 RECOFTC (Regional Community Forestry Training Center for Asia and Pacific: 第11号参照)から講師を招き、普及員代表者を対象とした「PFM 計画策定研修」を実施しました。主に PFM の理念や可能性に加え、集落地図や季節カレンダーの作成を通じて住民の能力強化を促す「参加型ツール」の方法、ファシリテーターとしての留意点などを学びました。



葉や枝を使った集落地図

研修の最後には、実際の WaBuB メンバーに参加してもらい、参加型ツールを活用した管理計画の策定を実践しました。WFS の実施を通じて、ある程度ファシリテーションの技術は向上したと見ていましたが、PFM に資するためには未だ不十分だというのが、正直な印象でした。例えば、各ツールの実施において、参加した住民の発言を促すことはできますが、住民の「気づき」や「発見」につながるような効果的な質問を投げかけることができず、むしろメモを取ることに忙しいため、単なる作業で終わってしまいます。これでは、「ファシリテーション」というよりも「調査」であり、住民の能力開花を促すどころか負担を強いることになってしまいます。また、各ツールを有機的に結びつけて計画策定につなげられればいいのですが、全体を見据えられずにツールを仕上げで満足してしまっているため、住民は何のためにこんな作業をするのか把握できずに戸惑っている様子でした。今後、月例の普及員ミーティングにおいて補完研修を取り入れるなど、引き続きサポートをしていく予定です。



住民による問題分析

## WFS 改善に向けた調査(ウガンダ・ケニア)

12月に53校のWFSグループが卒業を祝いましたが、この卒業生への今後のフォローアップや将来のWFSの持続性を検討するため、プロジェクトスタッフ4名と共に、ウガンダとケニアのフィールドスクールの活動状況を視察しました。ウガンダではFAO(国連食糧農業機



バナナの病虫害対策技術をFFSで実践

関)が支援し、バナナの病虫害対策技術の普及を目指すプロジェクトを見学し、WFSが農業技術の向上に限らず、様々なポテンシャルを持つツールであることを学びました。また、ケニアのカカメガでは卒業した農民達が自主的に組織

を広げてネットワーク化し、スクールの継続や小規模ローン融資の他、マーケティングの支援も行っており、今や有限会社として経営を継続している姿を見ることができました。しかし、ここでは6年近くをかけてFAOの基金を活用しながら今のカタチを築いてきており、本プロジェクトは残りの期間でどこまでWFSの成果を拡げていけるのか、現実的な出口戦略を検討し始める時期に来ています。



カカメガFFSネットワークによるプレゼンテーション

## プロジェクト中間評価が実施されました

3月にJICA地球環境部からの評価チームを迎え、プロジェクトの中間評価が実施されました。日本側だけでなく、オロミア州やジンマ森林公社のスタッフも加わり、これまで2年半におけるプロジェクトの実績や課題の整理



評価結果の報告と協議

に加え、今後プロジェクト終了まで1年半の具体的な実施計画、特にどうエチオピア側にプロジェクトの成果を引き継いでいくか...を双方で議論する良い機会となりました。

現地の視察や評価のとりまとめを経て、評価チームからは主に以下のような提言が挙げられました。

- 組織化された WaBuB の現状を踏まえ、既存 WaBuB の機能化を図るため、森林管理計画の策定・実施に向けた活動を優先する
- プロジェクト終了後の WaBuB 組織の持続性や森林コーヒーの円滑な出荷も視野に入れ、WaBuB の正規な協同組合化を支援していく
- エチオピア側にプロジェクトの成果を引き継いでいくため、郡レベルで定期的に協議を行うなど、エチオピア側がより活動のマネジメントに関与するための体制を築いていく

評価結果の提言を踏まえ、今後は WaBuB の機能化や組合化に向けた新たな活動と同時に、エチオピア側への引き継ぎの準備を少しずつ進めていきます。